

白石理事長祝辞

おめでとうございます。みなさんの多くは2016年の4月に震災を経験し、2020年の今、コロナウィルスが世界的に蔓延する中で、卒業されることとなりました。本来であれば、卒業生のみなさん全員と御両親に来ていただき、卒業式を行いたいとぎりぎりまで希望していましたが、こういう小規模な形での式となり、残念に思います。

英語に「known knowns」「known unknowns」「unknown unknowns」という言葉があります。知っているということを知っている。例えば、冬が終われば、春が来る。3月には卒業式があり、4月に入れば入学式・入社式がある。こういうことは「知っていることを知っている」ことです。これを「known knowns」といいます。しかし、世の中には、「知らないということを知っている」こともある。例えば、テクノロジーがどんどん進歩していくことを我々は知っている。しかし、どうテクノロジーが進歩していくか、その結果、我々の生活がどう変わるか、あるいは、どんな仕事をもっと必要とされるようになり、どんな仕事がロボットに取り替わっていくか、こういうことは全く想像できないということではありませんが、やはり、確実なところは分からない。これが「known unknowns」です。

実は、教育、別に大学教育だけでなく、小学校から大学までの教育というのは「known knowns」と「known unknowns」を教える、あるいは身に付ける、それが大きな目的ではないかと私は考えています。別の言い方をすると、我々の生活も世界もほとんど「known knowns」と「known unknowns」で組み立てられている。したがって、これについて学び、これに対応する力をつければ、かなりの程度、生きていくことができるということです。

しかし、それでも、この世界には知らないということすら知らない、あるいはわかっている、考えないということがあります。例えば、ときに大地震が起こるということを我々は知っていますが、4年前の大地震があれほどの規模で、また2度起こるということは誰も知らなかった。その意味で「unknown unknowns」の一つだった。今回の新しい感染症についても、SARS、エボラ、MERS、鳥インフルエンザなど、感染症が次々と起こっていることは、もちろんみんな知っていた。しかし、新しいタイプのコロナウィルスが出てきて、これほど短期間に、これほど広がるとは誰も知らなかった。また、どの位の感染率で、どの位の比率で感染者が亡くなっているのかはまだわからない。こういう「unknown unknowns」について、大学を含め、普通、教育の一環として教えられることはほとんど何もありません。しかし、みなさんがこういう状況に直面した際、どんな判断をして、どんな行動をとるか、そのベースを提供しておくことは大学の大きな仕事だろうと今更ながらに痛感しております。

人生には、また世の中には、不確実なことがいろいろあります。そういう不確実な状況に置かれたとき、皆さんが想像力と創造力を持って対応できる、その土台となるものを少しでも身につけられたことを祈ります。不確実性は常に我々に付いてまわります。いくらテクノロジーが進歩しても不確実性がなくなることはありませんし、ある意味、人の持つ可能性は、不確実性に直面した際にどう対応するかによって決まってくるとも言えます。

みなさんは大学でいろんなことを学ばれたと思います。卒業にあたって、これから先、みなさんが生きていく上で、一つ、頭のどこかに置いていただきたいことがあります。私の前

任者の五百旗頭理事長から2年近く前に聞いたことですが、2016年に入学した学生は少し違う、自分のイニシアティブでいろんなことをしようとしている、その意味では非常に特徴のあるクラスだ、とのことでした。今、こうして卒業されるにあたり、このイニシアティブということを是非、頭に置いていただきたいと思います。我々は決して一人で生きているのではない。みんなと一緒にコミュニティの中で生きている。では皆さんがコミュニティの中で生きていく上で、みんなにとってプラスになるためには何をすればよいか、自分にとってプラスで、他の人にもプラスになることは何か、そういうことをぜひ考え、行動し、これからの人生を歩んでいってほしいと思います。

10年後、20年後、みなさんが、熊本県立大学で学んでよかった、震災もあったし、コロナウィルスもあった、しかし、振り返ってみれば、あの時に、イニシアティブをとる上での土台を作れた、学ぶ、考えるとはどういうことかを学んだ、そう思っていただけのことを心から祈ります。

みなさん、今日は、卒業、本当におめでとうございます。